

[B年] 降誕前第8主日(2023年11月5日)

【旧約聖書日課】創世記3章1～15節

1主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。

「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

2女は蛇に答えた。

「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

4蛇は女に言った。

「決して死ぬことはない。5それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

6女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

8その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

10彼は答えた。

「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

11神は言われた。

「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」

12アダムは答えた。

「あなたがわたしと共にいるようにしてください。女が、木から取って与えたので、食べました。」

13主なる神は女に向かって言われた。

「何ということをしたのか。」

女は答えた。

「蛇がだましたので、食べてしまいました。」

14主なる神は、蛇に向かって言われた。

「このようなことをしたお前はあらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で呪われるものとなった。

お前は、生涯這いまわり、塵を食らう。」

15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。

彼はお前の頭を砕き

お前は彼のかかとを砕く。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙7章7～13節

7では、どういうことになるのか。律法は罪であろうか。決してそうではない。しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が「むさぼるな」と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。8ところが、罪は掟によって機会を得、あらゆる種類のむさぼりをわたしの内に起こしました。律法がなければ罪は死んでいるのです。9わたしは、かつては律法とかかわりなく生きていました。しかし、掟が登場したとき、罪が生き返って、10わたしは死にました。そして、命をもたらずはすの掟が、死に導くものであることが分かりました。11罪は掟によって機会を得、わたしを欺き、そして、掟によってわたしを殺してしまわれたのです。12こういうわけで、律法は聖なるものであり、掟も聖であり、正しく、そして善いものなのです。13それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらししたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのでした。

【福音書日課】ヨハネによる福音書3章13～21節

13天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。14そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。15それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

16神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。17神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。18御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。19光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。20悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。21しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかにするために。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

創世記 3章1～15節

¹神である主が造られたあらゆる野の獣の中で、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「神は本当に、園のどの木からも取って食べてはいけないと言ったのか。」²女は蛇に言った。「私たちは園の木の実を食べることはできます。³ただ、園の中央にある木の実は、取って食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないからと、神は言われたのです。」⁴蛇は女に言った。「いや、決して死ぬことはない。⁵それを食べると目が開け、神のように善悪を知る者となることを、神は知っているのだ。」⁶女が見ると、その木は食べるに良く、目には美しく、また、賢くなるというその木は好ましく思われた。彼女は実を取って食べ、一緒にいた夫にも与えた。そこで彼も食べた。⁷すると二人の目が開かれ、自分たちが裸であることを知った。彼らはいちじくの葉をつづり合わせ、腰に巻くものを作った。

⁸その日、風の吹く頃、彼らは、神である主が園の中を歩き回る音を聞いた。そこで人とその妻は、神である主の顔を避け、園の木の間に身を隠した。⁹神である主は人に声をかけて言われた。「どこにいるのか。」¹⁰彼は答えた。「私はあなたの足音を園で耳にしました。私は裸なので、怖くなり、身を隠したのです。」¹¹神は言われた。「裸であることを誰があなたに告げたのか。取って食べてはいけないと命じておいた木から食べたのか。」¹²人は答えた。「あなたが私と共にいるようにと与えてくださった妻、その妻が木から取ってくれたので私は食べたのです。」¹³神である主は女に言われた。「何ということをしたのか。」女は答えた。「蛇がだましたのです。それで私は食べたのです。」

¹⁴神である主は、蛇に向かって言われた。

「このようなことをしたお前は

あらゆる家畜、あらゆる野の獣の中で
最も呪われる。

お前は這いずり回り

生涯にわたって塵を食べることになる。

¹⁵ お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に

私は敵意を置く。

彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。」

ローマの信徒への手紙 7章7～13節

⁷では、何とすべきでしょうか。律法は罪なのか。決してそうではない。だが、律法によらなければ、私は罪を知らなかったでしょう。律法が「貪るな」と言わなかったら、私は貪りを知らなかったでしょう。⁸しかし、罪は戒めによって機会を捉え、私の内にあらゆる貪りを起こしました。律法がなければ罪は死んでたいたのです。⁹私は、かつては律法なしに生きていました。しかし、戒めが来たとき、罪が生き返り、¹⁰私は死にました。命に導くはずの戒めが、私にとっては死に導くものとなりました。¹¹罪が戒めによって機会を捉え、私を欺き、その戒めによって私を殺したのです。¹²実際、律法そのものは聖なるものであり、戒めも聖なるもの、正しく、善いものです。

¹³それでは、善いものが私に死をもたらすものとなったのでしょうか。決してそうではない。罪は罪として現れるために、善いものによって私に死をもたらししました。こうして、罪は戒めによってますます罪深いものとなりました。

ヨハネによる福音書 3章13～21節

¹³天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者は誰もいない。¹⁴そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。¹⁵それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」

¹⁶神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。御子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。¹⁷神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。¹⁸御子を信じる者は裁かれない。信じない者はすでに裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。¹⁹光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇を愛した。それが、もう裁きになっている。²⁰悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ない。²¹しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神にあってなされたことが、明らかにされるためである。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・11月5日「降誕前第8主日」の日課主題は「墮落」。この日は、11月第一主日で、伝統的な教会暦に従って、すべての死者を記念する「聖徒の日」とされている。元来の死者の記念日（「万聖節」および「万霊節」）は、11月1日および2日で、現在のローマ・カトリック教会は11月全体を「死者の月」と位置づけている。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、最初の人アダムとエバが蛇に唆されて禁じられた木の実を食べる物語。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、律法と罪の関係について述べられる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、ニコデモの逸話に続いて福音書記者によるキリスト理解が示された箇所。

旧約日課(創世記3章より)

・「創世記」について、特に「原初の物語(原初史)」については、前回「聖書と祈りの会 231025」を参照。

・日課箇所は、「原初の物語」の中に置かれた、「楽園追放の物語」の一部。天地創造の最初に創造された人「アダム」とその「妻」として造られた者が、「蛇」の唆しによって、食べることを禁じられていた「園の中央」に生えている木の果実を食べたことで、神から楽園(エデンの園)を追放される。楽園追放の理由は、禁じられていた果実を食べたことで人が神のように「善悪を知る者となった」(創3:22)ためであると語られている。これによって人が「罪」を犯す者になったと解され、この物語は「墮罪物語」と位置づけられてきた。また、このときにもたらされた「罪」を全人類が生まれながら負うようになったとの言説は「原罪論」と呼ばれ、後4-5世紀のラテン教父アウグスティヌスによって主張されて以来、西方教会の基本理解とされてきた。アウグスティヌスの「原罪論」は人間の「自由意志」を否定するものであるが、この思想の背景には、彼自身の信仰者としての原体験(青年時代の放蕩生活)があり、後に「ペラギウス論争」として知られるペラギウス派との神学論争によって強く主張されるようになったものである。ただし、この主張のおもな典拠は新約聖書(特に「ローマの信徒への手紙」5章)から取られていると見られる一方、「楽園追放の物語」では「罪」に関する言及は見られない。旧約聖書で初めて「罪」への言及が見られるのは、続く4章の「カインとアベルの物語」においてである(創4:7)。ユダヤ教では、「原罪論」は見られない。

・物語の前提として、2章の「男女の創造物語」の中で、「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」(2:17)という禁令が語られている。この木の生えている「園の中央」には「命の木」も生えていたとされている(2:9)。また、「楽園追放の物語」でも、人が「命の木」にも手を伸ばす危険が指摘されている。しかし、「命の木」に対する禁止命令は、どこにも語られていない。「命の木」は、シュメール神話に起源を遡るモチーフ。

使徒書日課(ローマ7書)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマの教会共同体に宛てて、自らの訪問計画とその後のエスパニア宣教計画に対する協力を求めて著した書簡。おそらく、コリント伝道で関与を深めたローマの教会共同体に属する信者らがパウロに対して抱いているかもしれない疑念を払拭するために、彼の現時点での福音理解を明示しようと努めた内容となっている。パウロの福音理解に基づく神学的主張は、コリント伝道への関与の前後で大幅に修正され、原理主義的な主張から調停的で包括主義の立場へと変化している。その集大成が本書簡に結実しており、それゆえに本書簡は「パウロ書簡集」の第一に置かれるものとされてきたと考えられる。

・パウロの神学的主張で常に注目されるのは、「律法」に関する立ち位置である。通俗的には、いわゆる「信仰義認論」をパウロの核心的主張とみるとき、「信仰」の対極に「行為」が位置づけられ、「行為」の源泉とみなされた「律法」は、「福音」すなわち「恵み」の対極に位置するものとされてきた。このような見方の典拠には、本書簡2~3章や「ガラテヤの信徒への手紙」が挙げられてきた。また、本書簡4~6章は、そのような「律法」理解に基づいて展開されていると考えられてきた。これらに基づいて、パウロは「律法」を否定したとみなす者もあるが、日課箇所は、そのようなパウロ理解に対して異なる見方を示す。すなわち、パウロは、ここで「律法」の聖性や正当性、善性を敢えて確認している。このような言説は、パウロの「律法」理解が混乱していることを示していると言わざるを得ない。

・パウロは、日課箇所「律法(ノモス)」と並んで「掟(エントレー)」という用語を導入している。本書簡中でパウロが「掟」の語を用いるのは、7:8が最初であり、日課箇所中で繰り返し用いるが、その後再度用いるのは、「十戒」に言及する13:9のみである。この語「掟」の用い方からして、パウロは、直前まで批判的な扱いをしてきた「律法」について、自ら用法に混乱があったことを認めていると言える。すなわち、広義に「(旧約)聖書」の第一部(トーラー)を指し、「神の教え・言葉」とほぼ同義で用いられる「律法」と、その中に含まれる諸規範・諸規則としての狭義の「律法」を、パウロはここに至るまで区別せずに「律法」の一語で扱っていたが、これが混乱を招いていることに気づいたのである。新約で「律法」と訳されるのはギリシア語「ノモス」で、ギリシア語旧約聖書(七十人訳)がヘブライ語「トーラー」の訳語として用いている。「トーラー」は、旧約ではおもに「教え」や「指示」と訳されており、諸規範や諸規定を指す場合に用いられる「掟(コーケ)」「法(ミシュパト)」「戒め(ミツヴァー)」などとは区別される。これらの諸規範・諸規定を「ユダヤ人らしさ」を規定する生活規範・社会習慣の枠組みに過ぎないとみなすところに、パウロの福音理解の要諦があるのである。

福音書日課(ヨハネ 3 章より)

・日課箇所は、「ニコデモの逸話」に続く箇所、「新共同訳」では主イエスの発言の一部であるかのように訳されているが、実際には 11 節以降、福音書記者が「ニコデモの逸話」に基づいたキリスト理解を展開している部分である。このように主イエスの逸話を語る延長で福音書記者の長大な解説(説教!)が付されるのは、本福音書が繰り返し用いる手法である。

・日課箇所の要点は、主イエスを天から遣わされた者であり、それゆえに再び天の上る者であると示すことにある。そのような者として示すために、ダニエル書 7:13 にあるような「人の子」のイメージが導入され、また「神の独り子・御子」という表象が取り上げられている。なお、「人の子」は「ヒュイオス・アンテュロープー」の訳、「独り子」は「ヒュイオス・モノゲネース」の訳、「御子」は「ヒュイオス」の訳。また「神の独り子」は「モノゲネース・ヒュイオス・テウー」の訳。「人の子」と「神の子」は属格形(≒所有格)で、対応する表現を用いている。

・14 節の「モーセ」の言及は、民数記 21:4 以下の「青銅の蛇の逸話」に基づく。

来週の誕生日 (11 月 5 日～11 日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-379 番「この世にあかし立てて」は、19 世紀を代表する讚美歌作家で英国教会主教にもなった W.W. ハウ。作曲は英国を代表する作曲家ヴォーン・ウィリアムズ。英語圏では聖徒の日 (All Saints' Day) にもっともよく歌われる讚美歌の一つ。
- ・21-509 番「光の子になるため」は、米国聖公会信徒の女性教会音楽家トマーソンの作詞作曲。1966 年夏の異常な猛暑の中で着想された。
- ・21-78 番「わが主よ、ここに集い」は、19 世紀スコットランド教会の牧師 H. ボナーが作詞した聖餐讚美。彼は、1843 年のスコットランド国教会分裂に際し、自由教会(独立派)の指導者の一人。同じ自由教会の牧師であった兄からの依頼で作詞。曲は、英国教会の音楽家 E. ホブキンズが別の歌詞のために作曲。
- ・21-503 番「ひかりにいます主」(= II 28 番)は、18 世紀ドイツ・ヘルンフート兄弟団の指導者ツィンツェンドルフの原詞(15 節版)を J. ウェスレーが英訳した英語版で広く知られる。曲は、18-19 世紀オーストリアの音楽家ブレイエルの原曲を 19 世紀英国の作曲家 W. ガーディナーが編曲したもの。

21-39「この世にあかし立てて」

For All the Saints, who from their Labours Rest

1. For all the saints, who from their labours rest, / who thee by faith before the world confessed, / thy Name, O Jesus, be forever blessed. / Alleluia, Alleluia!
2. Thou wast their rock, their fortress and their might; / thou, Lord, their Captain in the well-fought fight; / thou, in the darkness drear, the one true Light. / Alleluia, Alleluia!
3. For the apostles' glorious company, / who bearing forth the cross o'er land and sea, / shook all the mighty world, we sing to Thee: / Alleluia, Alleluia!

4. O blest communion, fellowship divine! / We feebly struggle, they in glory shine / yet all are one in thee, for all are thine. / Alleluia, Alleluia!
5. And when the strife is fierce, the warfare long, / steals on the ear the distant triumph song, / and hearts are brave, again, and arms are strong. / Alleluia, Alleluia!
6. The golden evening brightens in the west; / soon, soon to faithful warriors cometh rest; / sweet is the calm of paradise the blest. / Alleluia, Alleluia!
7. But lo! there breaks a yet more glorious day; / the saints triumphant rise in bright array; / the King of glory passes on his way. / Alleluia, Alleluia!
8. From earth's wide bounds, from ocean's farthest coast, / through gates of pearl streams in the countless host, / singing to Father, Son, and Holy Ghost: / Alleluia, Alleluia!

21-509「光の子になるため」

I want to walk as a child of the light

1. I want to walk as a child of the light; / I want to follow Jesus. / God set the stars to give light to the world; / The star of my life is Jesus.
- [Refrain] In him there is no darkness at all; / The night and the day are both alike. / The Lamb is the light of the city of God; / Shine in my heart, Lord Jesus.
2. I want to see the brightness of God; / I want to look at Jesus. / Clear Sun of righteousness, shine on my path, / And show me the way to the Father.
3. I'm looking for the coming of Christ; / I want to be with Jesus. / When we have run with patience the race, / We shall know the joy of Jesus.

21-78「わが主よ、ここに集い」

Here, O My Lord, I See Thee Face to Face

1. Here, O my Lord, I see thee face to face; / here would I touch and handle things unseen; / here grasp with firmer hand eternal grace, / and all my weariness upon thee lean.
2. Here would I feed upon the Bread of God; / here drink with thee the royal Wine of heaven; / here would I lay aside each earthly load, / here taste afresh the calm of sin forgiven.
3. I have no help but thine; nor do I need / another arm save thine to lean upon; / it is enough, my Lord, enough indeed; / my strength is in thy might, thy might alone.
4. Mine is the sin, but thine the righteousness; / mine is the guilt, but thine the cleansing Blood. / Here is my robe, my refuge, and my peace; / thy Blood, thy righteousness, O Lord, my God!

21-503「ひかりにいます主」

Seelen-Bräutigam

O thou to whose all-searching sight

1. O Thou, to Whose all-searching sight / The darkness shineth as the light, / Search, prove my heart; it pants for Thee; / O burst these bonds, and set it free.
2. Wash out its stains, refine its dross, / Nail my affections to the Cross; / Hallow each thought; let all within / Be clean as Thou, my Lord, art clean.
3. If in this darksome wild I stray, / Be Thou my Light, be Thou my Way; / No foes, no evil need I fear, / If Thou, my Lord, my God, art near.
4. Saviour, where'er Thy steps I see, / Dauntless, untried, I follow Thee; / O let Thy hand support me still, / And lead me to Thy holy hill.
5. If rough and thorny be the way, / My strength proportion to my day; / Till toil and grief and pain shall cease, / Where all is calm, and joy, and peace. / Amen.